素面ではかけない小説

神々のあらそい

空が泣いていた。
それは凪いだ私の心すらも騒めかせた。
その悲哀に満ちた甘美なる雫を飲み干す程の飢餓で、人間達は空の下に集った。

二十二世紀の初頭、気候科学者の佐藤上位(さとう　すぺりおる)によって行われた大規模実験により東京上空の降水機能が消滅、日本に雨の降り得ぬ土地が誕生した。数多くの弊害が生じ非難も飛び交ったが、三年後には消失地域全体を覆う人工降雨気候が整備され政府による完全な管理の下での気候制御が実現、東京の人々は予測外の気候とは完全に無縁の生活を享受していた。
「占いやってますよ〜、当たるんですこれが……」
そんな町の隅で占い屋を営む者がいた。運のいいことに、近くを通りかかった男がふらふらと椅子へ座った。
「そんなに当たるんですか、どんなことでも良いんですか」
「勿論ですとも。私は何でも知っています。私の名前は面映ゆい、今日は三月十二日、現在の気温は１６℃」
「素晴らしい！　一家に一台欲しいですね」
「でしょう。そんな占いが一回いくらだと思います？」
「う〜ん、千円くらいですかね」
「おぉなんとその通り！　あなた占い師の資質があるかもしれませんね、ではその資質を見込んで特別にサービス、八百円にして差し上げましょう」
「やったもうけた！　ではお願いします」
「やったもうけた！　では始めましょう」
「う〜ん、なるほど……わ！　三本の指が見えました」
「三本の指、ですか……？」
「えぇ。一つは味方の指でしょう。あなたが進むべき道を指し示してくれます」
「それはたすかりますね」
「そしてもう一つは敵の指、これはあなたが折るべきものです」
「指一本なら簡単そうですね！」
「そして最後の一本は……ふむ、これは……貴方の指ですね。あまり爪を伸ばしすぎないように」
「盲点でした……気を付けます」
「以上が占いの結果です。貴方に良き日が訪れますよう」
「あの……ラッキーアイテムとかってないんですか？」
「え……」
「占いなんですよね？　したらあるんじゃないですか」
「あ……えーと、甘いものとかいいですよ、運気良くなるので」
「ありがとうございます！　食べてきます」
「えぇ、ではさようなら」
男はまたふらふらと立ち上がると、地下鉄の駅の入り口の方へと消えていった。その行く末を見届けると面映はため息をつき、露店の片づけを始めた。実は彼女の本職は占い師ではなく、研究員なのである。国立大学付属の研究室に所属しており、現在は皮膚に塗ることで甘みを感じられる甘味料の開発をしているという。
ほどなくして面映は露店を畳み、研究室への道を歩き出した。道中に店を構えていた老人から占いに興味はないかと声をかけられるが、会釈だけして通過する。十分ほどで大学の研究室前に着いた。
「おはようございます面映さん、すべては国のために！」
「おはようございます天海さん」

「今日も国に貢献いたしましょうね！」
「はい。どうも」
暑苦しい同僚のいつもの挨拶を流しつつ、面映は研究室へと入る。天海の姿勢は国立の大学付属であり国家からの支援も受けている研究員としては理想的である一方、少々やりすぎではないか、と面映は以前研究室の仲間内で口にしたことがあるが、全員から冷ややかな目を向けられたため表に出さないでいる。
「おはようございます面映さん」
「おはようございます」
「おはようございます」
「おはようございます皆さん、研究の方は順調ですか？」
「ええ！　私天才かもしれません。昨日完成した肌に塗るとスーッとする新薬と、このミカンから抽出した甘味料を配合すれば、私たちの宿願、国家の使命が達成できるかもしれないんです！」
興奮気味に話す彼は桜咲太。永世花見名人に認定された先代・桜智羅須の息子であるが、当の本人は構わず研究室に籠って怪しげな新薬の開発をしている。
「それでは皆様拍手を！　今こそ配合の時です！」
「これでまた一つ暮らしを豊かにできますね！」
「こんなに幸福で良いんでしょうか……私」
面映が来たことで全員が揃った研究室は、ついに待ちに待った瞬間がやってきたという歓喜に包まれた。まず桜が左手に持った薬液を容器に入れ、そして次に右手の薬液を注ぐ。それだけのことが非常に意義深いことに見えた。
刹那。
容器から凄まじい量の蒸気が噴き出し、一瞬にして爆発した。
研究室はすべて吹き飛び、跡には何も残らなかった。それでも蒸気はとどまる様子をみせず、研究所の跡地から発生し続ける。膨大な量の蒸気は人間たちの困惑をよそに高く高く天へと昇っていき、空を覆った。
その時であった。なんとあろうことか、空から水が降ってきたのである。降水なしと定められたはずの日に、空から雨が降ってきたのである。先刻の爆発に驚いていた人々は、たちどころに雨に心を奪われた。
人々は皆雨に降られる用意をしていなかったと口にし、暫く忘れていた突然の雨に降られる感覚を思い出すと、ひとしきり喜んだ。
喜びの後、あることに気が付いた者がいた。
「この雨は甘いぞ！」
久方ぶりに東京に降った雨は、非常に甘かったのである。その甘さは非常に多くの人を虜とし、さらに多くの人々が集った。それからも訪れる人は絶えず、研究所跡は人気観光スポットとして有名になった。
今でも変わらずその場所で、甘い雨が降り続いているという……